

現代女子青年の親志向性を規定する心理的要因
－親との交流様態を指標として－

佐藤みどり*・吉田昭久**

（1998年10月6日受理）

Psychological Factors regulate Parent Orientation in the Female Adolescents
as an index of the Communication Mode between the Female Adolescents and
their Parents

Midori SATO, Teruhisa YOSHIDA

(Received October 6, 1998)

はじめに

かつて、女性は結婚して子どもを産み、本能的な愛情をもって子を育てることが当然であるという社会通念があった¹⁾。妊娠・出産という独自の生殖能力を有することから、子どもを産めばいとおしいと思ひ、限りない愛情を注ぐ「母性本能」が女性には存在するのであり、育児をするのは母親の役割であると考えられていた。しかし、そうした考えが生じた背景には、産業革命などの影響で近代的な意味での「家族」が成立し始め、経済成長を第一義にする政策のもとで、男性の労働力を再生産するため、また、未来の労働力を産み育てるために、妻と母としての役割が女性に課せられたという時代背景があった²⁾³⁾。

しかし現代では、家事の省力化による主婦役割の縮小や、高学歴化が進み、男女を問わず能力主義的・達成主義的な価値観を学ぶようになったことから、女性は妻や母として生きるだけではなく、自分自身の生きがいを求めるようになった⁴⁾⁵⁾。

子どもを自分の生きがいそのものであると考える女性が減少し、子どもは生きがいの一部でしかないと考える女性が増えているということについては度々指摘されている。たとえば小西ら（1981）は、戦前戦後を通して四つの年代の女性の育児意識を調査している⁶⁾が、そこでは、高年齢世代ほど育児を「女性の義務である」「生きがいであり、喜びである」と捉えているのに対し、若年齢世代では「自分の生きがいと育児は別である」と捉える傾向が強くなっていることを示している。小西らは、その根底には、若年齢世代における、育児は夫婦共同の仕事であり、女性の義務として拘束されるべきものではないという認識があると述べている。また、育児の印象については、「とても楽

* 茨城大学大学院教育学研究科教育臨床心理学研究室（〒310-8512 水戸市文京2-1-1）。

** 茨城大学教育学部教育臨床心理学研究室（同 上）。

しい」「充実感が味わえる」といったプラスの評価は、高年齢世代に比べて若年齢世代に少なく、「面倒なことが多い」「時間が足りなくて苦しい」「精神的に疲れる」といったマイナスの評価が高年齢世代に比べて若年齢世代に多くなっていると指摘している。

このように、育児に対する意識に世代による変化が生じている背景として、時代の変遷とともに社会的に期待されてきた母親役割が現代女性にとっては受け入れがたいものになったこと、自ら職業を持って自己実現を果たすことと「母親」になることとの間で、心理的な葛藤が起きていることが推測される。期待される母親役割を担い、社会的にも自己実現をめざそうとする現代女性においては、子どもは単純に愛情の対象となるだけではなく、同時に自分の人生を制約する存在として感じられていることを推量させる⁷⁾。

現代女性をとりまくこのような状況は、近年問題とされる少子化や育児不安といった現象にも影響を及ぼしていると考えられる⁸⁾。そこで、親になる前段階としての青年期において、現代女性が親になることについてどのような姿勢をもっているか、またそれはどのようにして獲得されるのか、即ち親志向性について究明することは、意義があることと思われる。

本研究では、現代女子青年の親志向性の構造と、それに関わる心理的要因について検討していくことを課題とする。なお、本研究では親志向性を「青年が、子どもの頃からの過程において、両親や社会・文化からの影響を受けて発達的に獲得した、子どもを得て親となることを望む姿勢」と定義して用いる。

I 現代女子青年の親志向性の構造

I-1 現代女子青年の親志向性の特徴

現代青年は、どのような親志向性をもっているのだろうか。その特徴を見ると、男女で大きく異なるようである。

山田（1982）の青年男女を対象とした研究⁹⁾では、男子は女子に比べて、「自分は将来良い親になれる」と考えている者が多く、「良い親になるための何らかの学校教育」が「必要だ」と考えている者は少なかった。ここには、女子青年と比べて男子青年の親になることへの自信の強さや親業に対する知見の無さが現れていると言えよう。また、「良い親になるための何らかの学校教育」が「必要だ」と答えた回答者が、その理由としてあげた内容をみると、男子では「受験勉強一辺倒ではなく、人間としての成長を促し、援助するような教育」といった、単に親になるためのというよりも、人間としての全人的な成長を念頭に置いた答えが多かったのに対し、女子では子どもの養育に関する、より実際的な内容をあげる者が多かった。このような、将来よい親になるために必要だと思う教育内容の男女間の相違について山田は、未婚の男子青年の視野の広さの表れとも言えるが、他方、子どもの実際的な世話は女性がするという予想や期待から生じる、将来の“親として”の自我関与が、男子青年において希薄であることの表れとも考えられるとしている。

女子と比較して男子の方が親になることへの自信が強いという傾向は、未婚の青年に限られた特徴ではなく、実際に乳幼児をもつ親の「親としての自信」も、父親の方が母親より強いとされている¹⁰⁾。これは、やはり育児を担当するのは母親であるという考えが一般的であることから、女子青年

は自らが親となったときの役割を簡単なものとみなしていないが故に、男子青年よりも親になることをためらったり、不安に感じたりするのだと考えることができる。

このように女子青年の親志向性は、社会的に期待される母親役割の影響を強く受けて、男子青年の親志向性とは異なる要因が働いていると考えられ、その構造も男女間で異なることが予想される。

I-2 親志向性の発達における両親との関係の影響

子どもの発達に、その親の与える影響の重大性については度々論じられている。青年期までに形成された親志向性についても、当然本人とその両親との関わりの中で獲得されたものは大きいであろうと推測できる。

妊娠し、出産する性であることを踏まえ、女性には「母性本能」があるといった考え方は、かつては広く存在しており、それは未だ根強く残っていると言えよう。しかし、誕生後、親や他の仲間から隔離されて育てられたサルは、成長しても性的行動をうまくとれず、子どもを産んでも子育てをしない、またはできないという研究結果¹¹⁾は、「母性」が本能ではなく、親や周囲の者の養育行動を観察する機会の中で獲得されるということを示している。また、人間を対象とした研究でも同様に、乳幼児との接触経験の多い者ほど乳幼児に対して好感情を抱く傾向があるという¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾。このような結果は、子どもへの養護的感情もまた経験によって獲得されるものと考えることができる。

さらに、自分の子どもの頃の両親との関係を母親がどう説明するかということと、母親の子どもとの実際的な関わり方には強い相関があるとされており¹⁵⁾、また成長の過程で両親と密接な交流をもち、愛され、適切な関わりをもったという経験によって、女子青年の子どもへの養護的態度は学習されることから¹⁶⁾、親になりたいという感情も促進課題と言えよう。

先行研究においては、青年の親志向性とその親との関係について調査する際、同性の親を本人が親になったときのモデルとしてとらえるという理由で、同性の親との関係のみで調査されてきた¹⁷⁾¹⁸⁾。しかし、親志向性は過去から現在にわたっての両親との関係性の影響を受けるものであると考えられるため、同性の親のみでなく異性の親との関係も考慮すべきであろう。

また、山田(1982)の青年男女を対象とした研究¹⁹⁾では、自分と同性の親を「親として良い方だ」と評価している者の内、「自分は将来良い親になれる」と答えるという傾向は、男子青年のみに見られ、女子青年には見られなかった。このことは、女子青年の親志向性が、同性の親との関係の影響を受けないということの意味するのではなく、先にも述べたように、女子青年と男子青年を比較するとき親になることについて女子青年の自信のなさを表すものであろう。自分の親を親としてどう評価しているかということよりも、成長するまでに親から受けた有形無形の関わりが、青年の親志向性の発達に影響を及ぼすと考えられる。

三尾(1993)の大学生男女を対象とした研究²⁰⁾においては、自分と同性の親に関してイメージ評定を行い、親志向性との関連を調べた結果、同性の親について良いイメージを抱いている者は、男女ともに親志向性が高かった。イメージ評定には、親に対する評価よりもこれまでの親との関係性から生じる感情が表れやすいと思われる。したがってこの結果は、親との好ましい関係が親志向性を高める可能性を示唆していよう。

そこで本研究においては、青年の親志向性は成長過程において両親との関係の中で経験によって獲得されると考えるため、両親との関係性を日常的な交流を踏えた視座から調査する。過去から現

在にわたって、両親とどのような交流関係にあったのかを、行動面と情緒面から探ることで、女子青年の親志向性を規定する心理的要因に関して検討することを本研究の目的とする。

Ⅱ 大学生女子を対象とした質問紙調査

Ⅱ-1 調査表の作成

本研究では、現代女子青年の親志向性に対する、両親との交流の影響に関して明らかにするため、現代女子青年の、過去から現在にわたる両親との交流様態の内部構造を明らかにし、親子関係のあり方に規定される親志向性について検討を行う。

その際、両親との関係をより詳細に調査するため、交流様態を情緒的側面と行動的側面に分節して調査した。従って、親志向性尺度、父親との情緒的交流尺度、母親との情緒的交流尺度、父親との行動的交流尺度、母親との行動的交流尺度の5尺度を作成した。

Ⅱ-1-a 親志向性の測定

佐藤（1997）の親志向意識尺度質問項目²¹⁾を用いた。これは、三尾（1993）の親志向意識尺度²²⁾をもとに、『大家族志向』といった親になりたい気持ちを直接表すものでないと判断した項目を除き、「子どもをもって、それだけに執着したくない」「子どものためだけに生きていくのは嫌だ」といった、女性特有の考え方を表すと考えられる項目を加えたものである。25の質問項目に対して、「そう思う」から「そう思わない」の5件法で回答を求めた。配点は「そう思う」5点、「そう思わない」1点とした。

Ⅱ-1-b 情緒的交流の測定

岩溪（1993）の父と娘の情緒的結びつき尺度²³⁾を用いた。本研究においては、情緒的交流と行動的交流を分けて測定するため、行動的交流を表現した項目「父はその日あったことを、よく私に話す」「私は、何か迷った時には、よく父に相談する」など7項目は削除した。その結果39項目を採用した。母親との情緒的交流尺度については、父親のものと同じ項目内容で構成した。父親、母親との情緒的交流尺度の質問項目について、それぞれ「あてはまる」から「あてはまらない」まで5件法で評定を求め、配点を「あてはまる」5点、「あてはまらない」1点とした。

Ⅱ-1-c 行動的交流の測定

母と娘の行動的交流については、佐藤（1997）の母と娘の接触行動尺度²⁴⁾を用いた。これは、大学生女子を対象に、過去から現在にわたる母親との関係について、自由記述で回答させた予備調査をもとに、母親との日常的な接触行動を表す内容の項目、33項目により構成したものである。父親との行動的交流については、女子大学生32名を対象に、父親と一緒にどのようなことをしている（していた）かなど、父親との関係を尋ねる予備調査を行い、それをもとに32の質問項目を作成した。父親、母親との行動的交流尺度の質問項目について、それぞれ「あてはまる」から「あてはまらない」まで5件法で評定を求めた。配点は「あてはまる」5点、「あてはまらない」1点とした。

Face Sheetには、1) 学年・年齢、2) 家族構成、3) 現在親と同居しているか否かを設定した。設定理由は以下の通りである。

- 1) 学年・年齢；本研究では、親になる前段階としての青年期の親志向性について検討することを目的としているため、年齢をとりあげた。
- 2) 家族構成；女子青年の親志向性への両親との交流様態の及ぼす影響を調べるため、被調査者は両親が健在である者に限定される。被調査者の両親が健在であることを確認するため、家族構成をとりあげた。
- 3) 現在親と同居しているか否か；親と同居しているかないかによって生じる、親との交流の仕方、親への感情の差異の影響を解消するため、親と同居していない者のみを調査対象とした。

II-2 方法及び被調査者の選定

調査は、平成9年11月から12月にかけて信州大学女子学生201名（平均年齢19.83歳）を対象に行った。親志向性尺度25項目、父と娘の情緒的結びつき尺度39項目、父と娘の接触行動尺度32項目、母と娘の情緒的結びつき尺度39項目、母と娘の接触行動尺度33項目の計168項目について、授業の開始時または終了時の20～30分程度で回答を求めた。

被調査者を4年制大学の女子としたのは、次の理由による。

社会的に期待される母親役割には大きな負担があり、現代女子青年は仕事と育児、家事といった女性役割との葛藤の中で、親になることをためらっている現状があると考えられる。上昇志向が心理的背景にある4年制大学の女子は、将来専業主婦になる可能性が比較的低いと考えられ、現代女子青年の親志向性の特徴が表れやすいと考えたことによる。

III 現代女子青年の親志向性に影響を及ぼす両親との交流様態に関する分析的検討

III-1 大学生女子の親志向性及び親との交流様態に関する因子分析的検討

大学生女子の親志向性及び両親との交流様態の特徴を探るため、「親志向性」「父親との情緒的交流」「母親との情緒的交流」「父親との行動的交流」「母親との行動的交流」の各尺度について、因子分析による検討を行った。各尺度の因子が抽出され、尺度の構造を明らかにした後に、両親との情緒的・行動的交流が親志向性に与える影響について検討するためである。分析は主因子法により、因子の回転は直交回転（バリマックス回転）とした。

これに先立ち、大学生女子の親志向性、両親との交流様態の実態を見るために、各尺度における各項目の平均値を求めた。

III-1-a 親志向性の尺度化

まず、25の質問項目に対して、項目ごとの基本統計量と各項目間の相関行列を算出し、因子分析を行った。その結果、因子数4の場合が最も解釈が妥当であった。第一因子～第四因子のすべてにおいて、負荷量が|0.4|未満であった項目、また二つ以上の因子に高い負荷量を示す項目を除き、再度

因子分析を行った。その結果、表1に示すように21項目に整理された。寄与率(%)は、第一因子が21.71、第二因子が18.17、第三因子が10.48、第四因子が10.06であり、累積寄与率は60.42%を示した。

第一因子は、「子どもはかわいい」「子どもが好きだ」「子どもは嫌いだ」など、子ども一般に対する感情が表れている項目を特徴とするため、『子ども観』因子と解釈した。

第二因子においては「子どもをもつことによって、新しい人生観、価値観が得られる」「子どもをもつことによって、自分自身も成長するきっかけができる」など、子どもをもつことにより人間的に成長することを望む姿勢がうかがわれる。従ってこの因子を『人間的成長』因子と解釈した。

第三因子では、「子育ては大変なので、なしとげる自信がない」「今のままの自分では、とても親になれない」など、育児及び親になることに対する不安を表す項目で構成されているため、『育児不安』因子と解釈した。

第四因子は、「子どもをもつても、それだけに執着したくない」「子どものためだけに生きていくのは嫌だ」など、子どもをもつことによって自己の人生が拘束される、伝統的な母親役割を回避したいという感情が表れている項目を特徴としている。従ってこの因子を、『親役割回避』因子と解釈した。

以上の結果から、女子青年の親志向性は、「子ども観」「人間的成長」「育児不安」及び「親役割回避」の4側面から構成されることが示唆された。

表2に示すように、因子ごとの各項目の平均値を算出して検討すると、第一因子『子ども観』においては、子どもに対する肯定的な感情を表す項目（25, 9など）では評定平均値が高く、子どもに対する否定的な感情を表す項目（20, 5など）では評定平均値が低い。大学生女子は子どもに対して肯定的な感情を抱いていることが推量できる。

第二因子『人間的成長』では、すべての項目で評定平均値が4を上回っており、子どもをもつことで人間的に成長したいという気持ちが強いと考えられる。

第三因子『育児不安』の、「15. 自信がない」「10. 子どもをもつことをためらう」といった項目では、評定平均値は3 前後で、「どちらでもない」と考えていることを推量させるが、同時に「22. 今のままの自分では、とても親にはなれない」という項目には肯定度が高く、大学生女子は必ずしも育児及び親になることへの不安が高いとは言えないが、現在の自分ではまだ親にはなれないと考えていることが示唆された。

第四因子『親役割回避』では、4項目中 3項目で評定平均値が4を超えているが、「8. 親になることは面倒なことだ」という項目には「どちらでもない」とする傾向があり、子どもをもつことによって拘束される、親役割を回避したいという感情は強いが、親になることが面倒だと強く思うまでには至っていない。

表1 親志向性尺度因子負荷量

項目番号及び内容	因子1	因子2	因子3	因子4
25 子どもはかわいい。	-0.84	0.21	0.07	-0.06
9 子どもが好きだ。	-0.83	0.23	0.04	-0.07
20 子どもは嫌いだ。	0.81	-0.16	-0.14	0.04
5 子どもが苦手だ。	0.74	-0.08	-0.17	0.08
16 子どもを見ていると心が安らぐ。	-0.71	0.24	-0.08	-0.09
11 子どもは無償で愛せる相手だ。	-0.59	0.37	-0.02	-0.18
13 結婚しても子どもは欲しくない。	0.59	-0.31	-0.28	0.18
6 子供をもつことによって、新しい人生観、価値観が得られる。	-0.19	0.83	0.04	-0.06
12 子供をもつことによって、自分自身も成長するきっかけができる。	-0.21	0.82	0.04	-0.12
14 子供をもつことで学ぶことがたくさんある。	-0.20	0.81	-0.05	0.12
21 子どもをもつと、視野が広がる。	-0.09	0.75	0.11	0.00
4 子どもをもつと精神的に強くなれる。	-0.37	0.69	-0.11	-0.18
1 子どもを育ててみないと、わからないことがある。	-0.36	0.48	-0.22	0.07
15 子育ては大変なので、なしとげる自信がない。	0.26	-0.22	-0.79	0.11
22 今のままの自分では、とても親にはなれない。	-0.01	0.17	-0.72	0.00
10 子どもは欲しいが、一人の人間の人格形成に影響を与えるという点 を考えると、ためらってしまう。	-0.04	0.10	-0.67	0.18
18 子どもをもつと、自分の性格が変わってしまう。	0.26	0.03	-0.51	-0.19
24 子どもをもつても、それだけに執着したくない。	0.00	0.00	-0.11	0.78
7 子どもをもつことが当然という考え方はおかしい。	0.06	-0.10	-0.12	0.73
2 子どものためだけに生きていくのは嫌だ。	0.27	-0.03	0.10	0.70
8 親になるということは、面倒なことだ。	0.37	-0.12	-0.30	0.48
寄 与 率	21.71	18.17	10.48	10.06
累 積 寄 与 率	21.71	39.88	50.36	60.42

表2 親志向性尺度の因子別項目評定平均値

F 1 『子ども観』		F 2 『人間の成長』		F 3 『育児不安』		F 4 『親役割回避』	
変 数	平均値	変 数	平均値	変 数	平均値	変 数	平均値
x25	4.20	x6	4.36	x15	2.92	x24	4.32
x9	3.74	x12	4.38	x22	3.90	x7	4.30
x20	1.90	x14	4.47	x10	3.05	x2	4.18
x5	2.49	x21	4.04	x18	2.56	x8	3.10
x16	3.41	x4	4.16	注) F1における項目5, 13, 20は逆転項目であり、 得点が低いほど子どもに対して好感情をもつ ことを示す。			
x11	3.70	x1	4.75				
x13	2.09						

Ⅲ-1-b 父親との情緒的交流の尺度化

39の質問項目に対して、親志向性の場合と同様の手続きにより因子分析を行った。その結果、因子数3の場合が最も解釈が容易であった。このときの寄与率(%)は、第一因子が23.86、第二因子が16.07、第三因子が14.01で、累積寄与率は53.94%であった。第一因子～第三因子のすべてにおいて、負

荷量が|0.4|未満の項目，また二つ以上の因子に高い負荷量を示す項目を除き，再度因子分析を行った。その結果を整理したものが，表3である。寄与率(%)は，第一因子が27.98，第二因子が18.04，第三因子が12.60であり，累積寄与率は58.61%を示した。

第一因子においては，「父と一緒に過ごす時間を大切にしている」「父と一緒にいると楽しい」といった父親と共にすごしたいという気持ちを表す項目と，「父が困っているときは，できるだけのことをしてあげたいと思う」や「父は自分のためにいろいろと気を配ってくれている」など，娘から父親への方向の結びつきと，父親から娘への方向の結びつきを示す項目の両方で構成されている。従って父親との『相互依存性』因子と解釈した。

第二因子は，「父は，自分を頼りにしている」「父は，あなたを心のよりどころにしている」など，娘が父親から愛され頼りにされていることを示す項目で構成されるため，父親からの『信賴的依存性』因子と解釈した。

第三因子は，「父なしには生きていけないような気がする」「長い間父と離れていると，なんとなく不安である」「父に反対されると，自分の決心がぐらついてしまう」など，父親の存在そのものへの娘の依存性を推量させる項目で構成されている。従って父親への『実存的依存性』因子と解釈した。

表3 父親との情緒的交流尺度因子負荷量

項目番号及び内容	因子1	因子2	因子3
22 父と一緒に過ごす時間を大切にしている。	0.82	0.25	0.13
13 父と一緒にいると楽しい。	0.79	0.20	0.12
21 父が自分のことを支持してくれるとうれしい。	0.76	0.13	0.29
23 父が困っているときは，できるだけのことをしてあげたいと思う。	0.71	0.15	0.19
34 なるべく父と一緒に食事をするようにしている。	0.70	0.19	0.10
9 自分のしたことを，父が認めてくれるとうれしい。	0.63	0.24	0.30
1 うれしいことは，まず父に知らせたいと思う。	0.61	0.31	0.21
10 父は，自分のために，いろいろと気を配ってくれている。	0.56	0.30	0.21
6 たいていの場合には，父の味方である。	0.56	0.30	0.24
15 父は，自分を頼りにしている。	0.09	0.83	0.12
30 父は，あなたを心のよりどころにしている。	0.21	0.82	0.14
3 父は，自分のことを励みにしている。	0.28	0.77	0.05
19 自分は，父の役に立っていると思う。	0.28	0.69	0.13
35 父なしには生きていけないような気がする。	0.18	0.13	0.75
17 長い間父と離れていると，なんとなく不安である。	0.31	0.19	0.66
38 父の様子や態度が気になるほうである。	0.34	0.05	0.61
4 父に反対されると，自分の決心がぐらついてしまう。	0.13	0.27	0.57
寄与率	27.98	18.04	12.60
累積寄与率	27.98	46.01	58.61

因子ごとに各項目の平均値を算出し検討すると（表4），第一因子『相互依存性』では，「9. 自分のしたことを，父が認めてくれるとうれしい」「10. 父は自分のためにいろいろと気を配ってくれている」といった項目において評定平均値が高く，「1. うれしいことは，まず父に知らせたいと思う」などの項目で評定平均値が比較的低い。これは，青年期における女子の父親との関わりは，父親の情緒的な支持は嬉しいが，嬉しいことがあったときにまず知らせたいのは父親ではないことを示しており，父と娘の現実的な結びつきは薄くなってきていることを推量させる。第二因子『信賴的依

存性』では、評定平均値は3前後で、父親から必要とされ役立っていると感ずることがある程度はあることを示している。第三因子『実存的依存性』では、評定平均値は比較的low、「35. 父なしには生きていけないような気がする」「17. 長い間父と離れていると、なんとなく不安である」といった、父親の存在自体に依存するような傾向は低いと言える。

表4 父親との情緒的交流尺度の因子別項目評定平均値

F 1『相互依存性』		F 2『信賴的依存性』		F 3『実存的依存性』	
変数	平均値	変数	平均値	変数	平均値
x22	3.13	x15	2.85	x35	2.71
x13	3.30	x30	3.00	x17	2.46
x21	3.98	x3	3.54	x38	3.05
x23	3.86	x19	2.69	x4	2.82
x34	3.03	注) 情緒的交流尺度項目は、岩溪(1992)が情緒的結びつきの成立を「父と娘の間で、相互に依存欲求が満たされている状態」として作成したものをを用いた。			
x9	4.06				
x1	2.60				
x10	4.00				
x6	2.78				

Ⅲ-1-c 母親との情緒的交流の尺度化

母親との情緒的交流に関しても、因子分析を行った。因子数3の場合が最も解釈がしやすく、このときの寄与率(%)は、第一因子が22.11、第二因子が15.40、第三因子が14.19で、累積寄与率は51.70%であった。第一因子～第三因子のすべてにおいて、負荷量が|0.4|未満であった項目、二つ以上の因子に高い負荷量を示す項目を除き、再度因子分析を行った。その結果、最終的な質問項目は表5に示す29項目となった。このとき寄与率(%)は、第一因子が25.41、第二因子が16.47、第三因子が13.14で、累積寄与率は55.02%であった。

第一因子は、「自信のないときでも、母に励まされるとやる気が出る」「心細いときでも、母がいてくれると安心である」「母と一緒にいると、なんとなく心強い」など、すべての項目が娘から母親への方向性の結びつきを表しており、母親から支持されたいという感情を表出している。従って、『被支持的依存性』因子と解釈した。

第二因子は、「母は、自分を心のよりどころにしている」「母は自分を頼りにしている」「母は、どんなことがあっても、自分のことを信じてくれる」など、娘が母親から愛され頼りにされていることを示す項目で構成されるため、母親からの『信賴的依存性』因子と解釈した。

第三因子は、「できるだけ母と一緒に時間をもちようとしている」「なるべく母と一緒に食事をするようにしている」「母と一緒に過ごす時間を大切にしている」といった、娘が母親と共に過ごすことを希望する気持ちを表す項目で構成されるため、『共存的依存性』因子と解釈した。

表5 母親との情緒的交流尺度因子負荷量

項目番号及び内容	因子1	因子2	因子3
20 自信のないときでも，母に励まされるとやる気が出る。	0.78	0.20	-0.20
2 心細いときでも，母がいてくれると安心である。	0.76	0.22	-0.23
7 母と一緒にいると，なんとなく心強い。	0.73	0.16	-0.27
14 困難なことでも，母の助けがあればできそうな気がする。	0.72	0.22	-0.14
12 母は自分の心の支えになっていると思う。	0.71	0.20	-0.31
17 長い間母と離れていると，なんとなく不安である。	0.69	0.05	-0.35
31 つらいときや悲しいときに，母のことが頭に浮かぶ。	0.69	0.24	-0.35
9 自分のしたことを，母が認めてくれるとうれしい。	0.66	0.02	-0.33
29 何があっても，母のことを信じていられる。	0.63	0.39	-0.01
16 母の言うことは正しいと信じられる。	0.62	0.35	-0.11
35 母なしには生きていけないような気がする。	0.61	0.07	-0.22
21 母が自分のことを支持してくれるとうれしい。	0.59	0.14	-0.28
38 母の様子や態度が気になるほうである。	0.57	-0.01	-0.37
4 母に反対されると，自分の決心がぐらついてしまう。	0.53	-0.08	-0.03
24 母は，自分のことをよく理解してくれている。	0.51	0.35	-0.26
30 母は，あなたを心のよりどころにしている。	0.06	0.77	-0.26
15 母は，自分を頼りにしている。	0.11	0.73	-0.32
3 母は，自分のことを励みにしている。	0.24	0.71	-0.17
19 自分は，母の役に立っていると思う。	0.22	0.66	-0.18
33 母は，自分の将来を楽しみにしている。	0.13	0.65	-0.31
39 母は，どんなことがあっても，自分のことを信じてくれる。	0.37	0.64	0.01
18 母のことをよく理解していると思う。	0.23	0.59	-0.21
32 母に愛されていると思う。	0.05	0.58	-0.13
27 母は，何かにつけて自分の味方をしてくれる。	0.32	0.48	0.08
25 できるだけ母と一緒に時間をもつようにしている。	0.32	0.19	-0.80
34 なるべく母と一緒に食事をするようにしている。	0.16	0.23	-0.76
22 母と一緒に過ごす時間を大切にしている。	0.32	0.27	-0.72
37 母とはできるだけ多く言葉を交わすようにしている。	0.30	0.30	-0.66
8 旅先から母に電話をかけることがある。	0.37	0.08	-0.52
寄 与 率	25.41	16.47	13.14
累 積 寄 与 率	25.41	41.88	55.02

因子ごとに各項目の平均値を算出し，表6に示した。第一因子『被支持的依存性』では，「9. 自分のしたことを，母が認めてくれるとうれしい」「21. 母が自分のことを支持してくれるとうれしい」などの項目で評定平均値が高く，「17. 長い間母と離れていると，不安である」「16. 母の言うことは正しいと信じられる」といった項目では評定平均値が比較的低い。青年期の女子は，母が自分のことを尊重し，支持してくれることはうれしいと考えるが，母親の存在自体に依存したり，母親の言うことを絶対視するようなことは少ないことが推量でき，青年期女子の自立した親子関係が伺える。

第二因子『信賴的依存性』においては，すべての項目で評定平均値が3を上回っている。中でも，「32. 母に愛されていると思う」「33. 母は自分の将来を楽しみにしている」といった項目では特に評定平均値が高く，母親からの愛情に対する信賴感に依拠した依存性が伺える。第三因子『共存的依存性』では，すべての項目で評定平均値が比較的高く，大学生女子が母親を気につけ，接触をもととする共依存の様相が伺える。

表6 母親との情緒的交流尺度の因子別項目評定平均値

F 1 『被支持的依存性』		F 2 『信賴的依存性』		F 3 『共存的依存性』	
変 数	平均値	変 数	平均値	変 数	平均値
x20	3.44	x30	3.47	x25	3.34
x2	3.89	x15	3.44	x34	3.51
x7	3.68	x3	3.74	x22	3.62
x14	3.25	x19	3.14	x37	3.74
x12	3.78	x33	4.00	x8	3.75
x17	2.90	x39	3.70		
x31	3.00	x18	3.41		
x9	4.20	x32	4.40		
x29	3.39	x27	3.24		
x16	2.90				
x35	3.04				
x21	4.19				
x38	3.51				
x4	3.11				
x24	3.62				

注) 母親との情緒的交流尺度項目は、岩溪(1992)が、情緒的結びつきの成立を「父と娘の間で、相互に依存欲求が満たされた状態」として作成した項目のうち、「父」という表現を「母」に変えて用いている。

Ⅲ-1-d 父親との行動的交流の尺度化

他の尺度における検討と同様に、因子分析を行った。その結果、表7に示す5因子を抽出した。このときの寄与率(%)は、第一因子19.33、第二因子10.23、第三因子9.37、第四因子6.92、第五因子は6.40であり、累積寄与率は52.24%であった。第一因子～第五因子において、負荷量が|0.4|未満であった項目と二つ以上の因子で高い負荷量を示す項目を除き、再度因子分析を行った。その結果、最終的な質問項目は表7に示す28項目となった。寄与率(%)は、第一因子19.41、第二因子10.38、第三因子10.02、第四因子7.46であり、第五因子は7.04で、累積寄与率は54.31%であった。

第一因子は、「悩み事は、父に相談する」「自分の将来の夢、目標などの話をする」「大切なことを決めるときは、父に相談する」など、娘と父親とが交流をもとうとする項目で構成されるため、父親への『共依存的関係性』因子と解釈した。

第二因子は、「父は、自分が子どもの頃、よく遊び相手になってくれた」「父親参観日、運動会、卒業式などに来てくれた」「子どもの頃、家族旅行、海、山、プールなどに連れて行ってくれた」などの、父親としての行動を表す項目や「母親に叱られたとき、かばってくれた」といった、父親の娘への保護的な行動を表す項目により構成されるため、父親からの『保護的關係性』因子と解釈した。

第三因子は、「父は何かを決めるときには、よく自分にアドバイスを求める」「父は自分の交友関係を知りたがる」「父は、困ったときは自分に助けを求める」など、第一因子とは逆に父親が娘と交流をもとうとする項目で構成されるため、父親との『受動的関係性』因子と解釈した。

第四因子は、「父の服装や行動に、自分が文句を言ったりする」「父に健康を気をつけるよう助言する」「父に料理を作ってあげる」など、全て娘が父親に対して気を配り、世話を焼くといった行動

を表す項目のため，父親への『指示的關係性』因子と解釈した。

第五因子は，「父の考えを自分に押しつけようとする」「父は，子どもの頃から自分の生活に干渉してくることは少なかった」といった項目で構成され，すべての項目が父親の娘に対する支配的な行動を表す項目であることから，父親からの『支配的關係性』因子と解釈した。

表7 父親との行動的交流尺度因子負荷量

項目番号及び内容	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
30 悩み事は，父に相談する。	0.83	0.01	0.15	0.00	0.04
27 自分の将来の夢，目標などの話をする。	0.75	0.19	0.10	0.27	-0.07
14 欲しいもの，やりたいことはまず父に話した。	0.72	0.18	0.19	0.06	0.18
8 学校での出来事や，友達のことなどをよく父に話した。	0.65	0.32	0.14	0.25	-0.13
10 自分がつらいとき，父が言葉をかけて励ましてくれた。	0.64	0.26	0.25	-0.02	0.01
5 大切なことを決めるときは，父に相談する。	0.62	0.12	0.31	0.19	0.16
26 わからないことは，たいてい父に聞く。	0.61	0.10	0.29	0.14	0.10
13 父の誕生日や父の日などに，電話をかけたりプレゼントをししたりする。	0.60	0.17	0.05	0.35	-0.15
21 父と一緒に映画を観に行く。	0.58	0.01	0.07	0.00	-0.28
17 父は，自分が子どもの頃，よく遊び相手になってくれた。	0.23	0.76	0.10	0.07	0.06
9 父親参観日，運動会，卒業式などに来てくれた。	0.14	0.69	0.09	0.16	-0.11
15 子どもの頃，家族旅行，海，山，プールなどに連れていってくれた。	0.13	0.67	0.04	0.19	0.05
16 母親にしかられたとき，父がかばってくれた。	-0.02	0.60	0.34	-0.04	-0.18
29 父の仕事が忙しくて，あまり相手にしてもらえなかった。	-0.37	-0.49	0.26	0.25	-0.30
25 父に，勉強やスポーツを教えてもらった。	0.29	0.46	0.31	0.15	0.02
2 父は，何かを決めるときには，よく自分にアドバイスを求める。	0.29	0.14	0.73	-0.16	0.01
3 父は，自分の交友関係を知りたがる。	0.21	0.07	0.56	0.15	0.32
32 父は，困ったときには，自分に助けを求める。	0.22	0.03	0.56	0.09	0.06
6 父の仕事や，職場での出来事について話をする。	0.35	0.09	0.52	0.26	-0.11
4 父と一緒にテレビを見ながら，番組について話をする。	0.38	0.18	0.51	0.17	-0.05
31 父の子どもの頃や，学生時代の思い出についての話をする。	0.25	0.26	0.47	0.20	-0.06
23 父の服装や行動に，自分が文句を言ったりする。	0.12	0.10	-0.03	0.83	0.19
19 父に健康に気をつけるよう，助言する。	0.38	0.13	0.20	0.55	-0.15
28 父に料理を作ってあげる。	0.38	0.11	0.11	0.49	-0.17
11 父の考えを，自分に押しつけようとする。	-0.16	-0.15	0.06	-0.11	0.71
7 父は，子どもの頃から自分の生活に干渉してくることは少なかった。	-0.15	-0.09	0.13	-0.11	-0.70
18 自分の服装や行動に，父が注文をつける。	0.01	0.01	0.29	0.32	0.60
寄 与 率	19.41	10.38	10.02	7.46	7.04
累 積 寄 与 率	19.41	29.79	39.81	47.27	54.31

因子ごとに算出した各項目の平均値を，表8に示した。第一因子『共依存的關係性』においては，多くの項目は評定平均値が3前後で，被調査者の多くが「どちらともいえない」と答えていることを示しているが，「21. 父と一緒に映画を観に行く」「30. 悩み事は父に相談する」といった項目では評定平均値が低かった。大学生女子にとって父親は，わからないことを聞いたり，誕生日に電話をかけたりする存在ではあるが，一緒に映画を観たり，悩み事を相談するといった，友達のように密接した関係ではないことを示唆している。第二因子『保護的關係性』においては，「16. 母親に叱られたとき，かばってくれた」という項目以外は，すべて，子どもの頃，父親に遊んでもらったり，家族旅行に連れていってもらったり，運動会や参観日に来てもらったといった経験のあることが伺え

る。第三因子『受動的関係性』では、「32. 父は困ったときには、自分に助けを求める」「2. 父は何かを決めるときには、よく自分にアドバイスを求める」「3. 交友関係を知りたがる」といった項目での評定平均値は低く、「4. 一緒にテレビを見ながら、番組についての話をする」という項目での評定平均値は比較的高かった。大学生の女子に対して、父親が助けを求めるという交流は少なく、一緒にテレビを見て会話をするといった日常的な交流のあることを示唆していよう。

第四因子『指示的關係性』からは、大学生女子が父親に対して気配りを示したり、文句を言ったりする交流は、少なからずあると考えられる。第五因子『支配的關係性』においては、評定平均値は3前後で、父親が娘の生活に干渉したり、考えを押し付けたりすることはかなりあるが、「18. 服装や行動に注文をつける」といったことは、あまりないと見ることができる。

表8 父親との行動的交流尺度の因子別項目評定平均値

F 1『共依存的 関係性』		F 2『保護的 関係性』		F 3『受動的 関係性』		F 4『指示的 関係性』		F 5『支配的 関係性』	
変数	平均値	変数	平均値	変数	平均値	変数	平均値	変数	平均値
x30	2.03	x17	3.44	x2	2.19	x23	3.04	x11	2.73
x27	3.06	x9	3.51	x3	2.36	x19	3.64	x7	2.96
x14	2.50	x15	4.23	x32	1.75	x28	2.90	x18	2.34
x8	3.01	x16	2.74	x6	3.03				
x10	3.10	x29	2.59	x4	3.46				
x5	3.38	x25	3.28	x31	3.17				
x26	2.83	注) 項目7, 29は逆転項目であり、得点が低いほど父親との行動的交流の多いことを示す。							
x13	3.39								
x21	1.72								

Ⅲ-1-e 母親との行動的交流の尺度化

父親との行動的交流の場合と同様に33の質問項目に対して、因子分析を行った。分析法は主因子法、因子の回転は直交回転(バリマックス回転)に依った。このときの寄与率(%)は、第一因子が16.67、第二因子が11.91、第三因子が9.32、第四因子が7.13で、累積寄与率は45.01%であった。第一因子~第四因子の負荷量が|0.4|未満であり、二つ以上の因子で高い負荷量を示す項目を除き、再度因子分析を行った。その結果、最終的な質問項目は表9に示す24項目となった。寄与率(%)は、第一因子17.79、第二因子13.84、第三因子11.71、第四因子が7.34で、累積寄与率は50.67%であった。

第一因子は、「母と一緒に旅行をする」「母を誘ってどこかへ出かけたりする」「母と共通の趣味について話をする」など、母親と一緒に何かをしたり話したりするといった内容の項目が過半数を占め、母親との一体感を表していると考えられるため、これを母親との『一体感的関係性』因子と解釈した。

第二因子は、「大切なことを決めるときは、母に相談する」「悩み事は、母に相談する」「欲しいもの、やりたいことは、まず母に話した」など、娘が母親と交流をもとうとする項目内容で構成されるため、母親への『依存的关系性』因子と解釈した。

第三因子は、「母は、自分のすることに、いちいち口を出す」「母に、口うるさく叱られた」「母が、自分の交友関係を知りたがる」など、母親から娘への方向性をもつ行動を表す項目で構成されるた

め、母親からの『干渉的關係性』因子と解釈した。

第四因子は、「子どもの頃、母はいつも一緒にいてくれた」「子どもの頃、母がよく遊び相手になってくれた」「母は、自分の誕生日を忘れずに祝ってくれた」などの項目で構成されるため、母親からの『保護的關係性』因子と解釈した。

表9 母親との行動的交流尺度因子負荷量

項目番号及び内容	因子1	因子2	因子3	因子4
15 母と一緒に旅行をする。	0.74	0.01	-0.09	0.27
31 母を誘って、どこかへ出かけたりする。	0.72	0.30	-0.07	0.17
11 母と、共通の趣味について話をする。	0.67	0.35	-0.07	0.08
14 母が人生観について、自分に話す。	0.67	0.18	0.26	-0.03
17 母が自分に悩みなどを相談して、頼ってくる。	0.64	0.32	0.30	-0.07
13 休日など、母がいろいろなところに連れていってくれた。	0.62	-0.10	0.07	0.31
33 母と一緒にテレビを観ながら、番組について話をする。	0.55	0.18	0.09	-0.27
26 母と一緒に買い物に行く。	0.54	0.25	-0.13	-0.09
24 母に健康に気をつけるよう、助言する。	0.45	0.36	-0.09	-0.27
18 母に料理を作ってあげる。	0.42	0.06	0.03	-0.05
32 大切なことを決めるときは、母に相談する。	0.13	0.82	0.10	0.10
19 悩み事は、母に相談する。	0.34	0.72	0.02	0.17
8 欲しいもの、やりたいことは、まず母に話した。	0.24	0.71	0.05	0.09
1 わからないことは、たいてい母に聞く。	-0.08	0.71	0.06	0.09
29 自分がつらいとき、母が言葉をかけて励ましてくれた。	0.37	0.59	-0.03	-0.03
25 母は、自分のすることに、いちいち口を出す。	0.02	0.02	0.85	-0.11
27 母に、口うるさく叱られた。	0.00	0.03	0.76	0.03
12 母の考えを、自分に押しつけようとする。	0.12	-0.01	0.71	-0.04
7 母が、自分の交友関係を知りたがる。	0.09	0.22	0.62	0.12
28 母は、子どもの頃から自分の生活に干渉してくることは少なかった。	-0.20	0.07	0.61	0.26
20 子どもの頃、母はいつも一緒にいてくれた。	0.11	0.28	0.06	0.71
3 子どもの頃、母がよく遊び相手になってくれた。	0.29	0.15	-0.06	0.56
21 母は、自分の誕生日を忘れずに祝ってくれた。	0.16	0.11	-0.03	0.47
9 母が、参観日、運動会、卒業式などに来てくれた。	0.05	0.16	-0.10	0.45
寄 与 率	17.79	13.84	11.71	7.34
累 積 寄 与 率	17.79	31.63	43.34	50.67

因子ごとの各項目の平均値に関して、表10に示した。第一因子『一体感的關係性』では、ほぼすべての項目で評定平均値が3を上回っており、特に「26.一緒に買い物に行く」「24.健康に気をつけるよう助言する」「33.テレビを見ながら話をする」という項目で評定平均値が高く、母親と一緒に行動したり、話をするといった日常的な交流の多いことが推量できる。第二因子『依存的關係性』でも、すべての項目で評定平均値が3を上回っており、大学生女子にとって母親が、大切なことを相談したり、つらいときに励ましてくれる存在であることを示している。第三因子『干渉的關係性』では、「7.交友関係を知りたがる」「27.口うるさく叱られた」といった項目では評定平均値が比較的高いが、「12.母の考えを押しつけようとする」という項目では比較的低く、この点で父親との関係とは異なることが解る。大学生女子にとって、同性の母親は日常的な交流をもち、いろいろなことを話し合える存在であり、父親の場合と違って考えを押し付けられるようには感じていないことを示していよう。第四因子『保護的關係性』では、すべての項目で評定平均値が3を上回っており、特に

「9. 参観日，運動会，などに来てくれた」「21. 誕生日を忘れずに祝ってくれた」といった項目への肯定度は高い。

表10 母親との行動的交流尺度の因子別項目評定平均値

F 1 『一体感的関係性』		F 2 『依存的関係性』		F 3 『干渉的關係性』		F 4 『保護的關係性』	
変数	平均値	変数	平均値	変数	平均値	変数	平均値
x15	3.16	x32	3.70	x25	3.15	x20	3.42
x31	3.36	x19	3.05	x27	3.47	x3	3.29
x11	3.33	x8	3.49	x12	2.67	x21	4.11
x14	3.06	x1	3.27	x7	3.56	x9	4.55
x17	2.95	x29	3.81	x28	2.74		
x13	3.25	注) 項目28は逆転項目であり，得点が低いほど母親との行動的交流の多いことを示す。					
x33	3.89						
x26	4.32						
x24	3.92						
x18	2.98						

Ⅲ-2 現代女子青年の親との交流様態と親志向性との関連

表11 親志向性尺度と
両親との交流との重相関係数

親志向性尺度*	両親との交流
親志向性	.30
『子ども観』	.38
『人間的成長』	.40
『育児不安』	.13
『親役割回避』	.19

*両親との交流様態を示す4尺度

父親，母親との情緒的交流と，父親，母親との行動的交流が，女子青年の親志向性に影響を及ぼす程度を調べるために，重回帰分析を行った。親志向性尺度の各因子と両親との交流4尺度との重相関係数を示したのが表11である。現代女子青年の親志向性と両親との交流の間には強いとは言えないが，相関が見られた。このことは，現代女子青年の親志向性には様々な要因が関わっていると考えられるが，相関が見られたことから両親との交流もその要因として捉えられる。親志向性の中でも，『育児不安』『親役割回避』因子については，両親との交流とほとんど相関が見られなかったことは興味深い。

両親との交流の各尺度と親志向性尺度の各因子との単相関係数と標準回帰係数を示したものが表12である。

表12 親志向性の各因子に及ぼす両親との交流様態の影響

因子 分析 交流様態	子ども観		人間的成長		育児不安		親役割回避	
	単相関	回帰係数	単相関	回帰係数	単相関	回帰係数	単相関	回帰係数
父情緒	0.31	0.03	0.16	** 0.43	-0.05	-0.10	0.16	0.01
母情緒	0.30	** 0.29	0.40	0.07	0.01	0.14	0.11	0.12
父行動	0.29	* 0.24	0.15	-0.06	-0.06	0.05	0.16	0.17
母行動	0.16	0.14	0.38	-0.07	-0.09	-0.16	0.04	-0.12

注) † ; p < .10 * ; p < .05 ** ; p < .01 *** ; p < .001

親志向性の因子別にみると、両親との交流様態のうち、『子ども観』と最も強い関係を示したのは母親との情緒的交流で、次に関係の強いのは父親との情緒的交流であった。『人間的成長』と最も強い関係が見られたのは父親との情緒的交流で、『育児不安』『親役割回避』については特に強い関係をもつものは見出せなかった。

重回帰分析の結果から、現代女子青年の親志向性と両親との交流様態との間に何らかの関係があることが示唆された。そこでさらに、両親との交流の多い者と少ない者との親志向性を比較することで、両親との交流と親志向性との間の因果関係について確認することとした。そのため、両親との交流様態の4尺度それぞれの得点によって、被調査者を高群（25%）、低群（25%）の2群に分割し、それぞれの群における親志向性尺度の平均値と標準偏差を求めて、平均値間の差の検定（t検定）を行った。なお、この2群間には、すべて0.001%以下で得点に有意差が認められた。

表13 両親との交流様態と親志向性の関連

交流様態 \ 因子	親志向性	子ども観	人間的成長	育児不安	親役割回避
父・情緒	**	**	***		
母・情緒		†			
父・行動		*	*		
母・行動				*	
父（情緒・行動）	***	***	***		*
母（情緒・行動）	**	***	**		
父母（情緒）	***	***	***		
父母（行動）	**	***	*		
父母（情緒・行動）	***	***	***		

注) †; $p < .10$ *; $p < .05$ **; $p < .01$ ***; $p < .001$

表13に示したように、両親との交流様態の得点の高低によって親志向性に有意差が見られたのは、『子ども観』因子では、父親との情緒的交流と父親との行動的交流で、傾向がみられたのは母親との情緒的交流であった。すなわち、交流の多い者は少ない者と比べて、肯定的な子ども観をもっていると言える。また、情緒的、行動的なものを総合した父親との交流、母親との交流、両親との情緒的交流、両親との行動的交流、さらに両親との情緒的・行動的交流のいずれにおいても、交流の多い者は少ない者より肯定的な子ども観をもつことが示された。

次に、『人間的成長』因子で見ると、父親との情緒的交流、父親との行動的交流の多い者は少ない者と比較して有意に得点が高く、交流の多い者ほど子どもをもつことで人間的な成長を期待することが明らかとなった。さらに、父親との情緒的・行動的交流、母親との情緒的・行動的交流、両親との情緒的交流、両親との行動的交流、両親との情緒的・行動的交流のいずれにおいても、交流の多い者は少ない者より、子どもをもつことで人間的な成長を期待する感情が強いということが示唆された。

親志向性のうち『子ども観』『人間の成長』においては、個別に分析した場合には有意な結果が得られなかった母親との交流についても、情緒的・行動的交流を総合して分析を行うと、交流の多い者の方が親志向性が高いという結果が得られている。これは、母親との関係の中で情緒的な面でも行動的な面でも交流が少ないという場合、親志向性の発達にネガティブな影響を及ぼすためではないかと考えられる。行動的交流においても同様の結果が得られており、父親、母親ともに行動的交流の少ない者は多い者と比較して、親志向性が発達しにくいと考えられる。

『育児不安』因子については、母親との行動的交流でのみ得点に有意差が見られ、交流の多い者は少ない者と比較して育児や親になることへの不安が少ないという結果が得られた。しかし、その他の父親との交流や母親との情緒的交流、及びそれらを総合した両親との交流においては、交流の多い者と少ない者との間で差は見られなかった。これには、次のような要因が考えられる。そもそも、育児や親になることへの不安感というものは誰もが程度もっており、低ければ低いほど親になることに意欲的であるとは言えない。むしろ不安が極端に低く、親になることに対する自我関与の低い者の場合は、親になることへの意欲も低いのではないかと考えられる。未婚で、しかも学生である女子青年にとって、親になることはまだ未知のことであり、身近な出来事とは言えない。とくに、母親というのは父親よりも従来育児の負担が大きいと考えられているため、いずれは親になりたいという気持ちが強くても、親になることへのある程度の不安はあると考えてよい。これは、女子青年のみが、自分と同性の親を「よい親」だと評価していても、自分がよい親になれると答える傾向が見られなかったという山田（1982）の研究結果²⁵⁾と通底していよう。しかし、そのような状況が考えられる中で、母親との行動的交流の多い者は低い者より不安感が低いという結果が得られたことは、女子青年は過去から現在に至る母親との行動的交流の中で、母親としてのあり方を見聞きして学び取り、自分が母親になったときの姿勢に関する予測ができるためと推測できる。

『親役割回避』因子においては、両親との交流様態のうち、情緒的・行動的なものを総合した父親との交流においてのみ関連が見られ、交流の多い者は少ない者と比較して、子どもをもつことで拘束されたくないという感情が弱かった。しかし、その他の母親との交流や両親との交流、及び父親・母親との情緒的または行動的交流において、交流の多い者と少ない者との間で差は見られなかった。このことに関しては、次のような理由が考えられる。現代女性は、社会から期待される母親像と自己の価値意識との間に大きなずれを感じており、それが子どもをもつことで拘束される従来親役割を一貫して回避する傾向を示したと考えられる。青年から母親になるまでの母性意識について調査した研究（久世、芳賀、吉見、加藤、1992）²⁶⁾では、「素敵な女性よりも良い母親と言われたい」という質問に対し、Yesと答えた者を母親志向、Noと答えた者を女性志向としたとき、妊娠中の女性、乳児や幼児のある母では母親志向の者は肯定的な母親像をもつが、学生では母親志向か女性志向かによって、母親像に差は見られなかった。久世らはこれを、学生は素敵な女性が即悪い母親ととらえているのではなく、素敵な女性でもあり良い母親でもありたいと考えているためではないかと考察している。このことは、現代女性が従来親役割を疑問視し、母親としてだけでなく、一人の人間として自己の生き方を追求したいと考えていることを示唆していよう。

今回の調査で、両親との交流の多い者と少ない者との間で、現代女子青年の親志向性に最も違いが見られたのは、情緒的・行動的なものを総合した父親との交流であった。現代女子青年の親志向性について、母親よりも父親との交流の方が強い影響を及ぼす結果が得られたことについて、原因

として母親との関係に比して女子青年の父親との関係の希薄さが考えられる。父親との情緒的・行動的交流と母親との情緒的・行動的交流の各尺度における項目ごとの評定平均値を見ても、女子青年と父親との交流は、母親と比べて少ないことが示されている。そのような交流様態の中で、ほとんど父親と交流をもたない者は、親志向性をも含めた親子関係の質や在り方にネガティブな影響を表すと考えられる。

これまで親志向性は、親からの影響を考慮する際、本人と同性の親との関係のみで論じられてきた²⁷⁾²⁸⁾が、今回の調査の結果から、同性の親のみでなく異性の親との関係も影響することが示唆された。また、交流の質的側面を見ると、情緒的交流の方が行動的交流よりも若干強い影響を与えることが示された。総括的に見ると、両親との交流の多い家庭環境の中で育つことが、親志向性の発達に影響を与えると考えられる。

親志向性のうち『子どもに対する感情』『人間的成長』は両親との交流様態と強く関わっていたが、『育児不安』『親役割回避』においてはあまり関係が見られなかった。これは、親志向性について両親との関わりの影響を強く受けて獲得される『子ども観』『人間的成長』の側面と、両親との関わりの影響は少なく、社会・文化的状況や現代女性一般の価値意識を反映する『育児不安』『親役割回避』の側面とを考慮することの必要性を示唆している。

おわりに

現代女子青年の親志向性は、表1に示す『子ども観』『人間的成長』『育児不安』『親役割回避』の四つの因子で構成されることが明らかとなった。さらに、現代女子青年の親志向性とそれに影響を与える両親との交流様態の関連について検討した結果、まず親志向性と両親との交流様態には、少なからず関連があることが示唆された。すなわち、両親との情緒的・行動的交流が多い者ほど、親になることに肯定的な態度を示し、子どもに対して肯定的な感情を抱き、子どもをもつことで人間的に成長することを期待するということが示唆された。しかし親志向性の中でも、育児及び親になることへの不安感や、子どもをもつことで拘束される親役割を回避したいという感情は、両親との交流様態の影響をあまり受けなかった。そのため、現代女子青年の親志向性は、両親との交流の影響を強く受けて獲得される側面と、他の要因の影響を受けて獲得される側面とに分化することが推測される。

そこで今後は、親志向性のうち「育児不安」・「親役割回避」といった側面を規定する心理的要因について、現代社会状況因を踏まえて検討することを考えている。

最後に、本論文は佐藤の1997年度信州大学卒業論文²⁹⁾に関して加筆・修正したものであり、草稿の最終的点検を吉田が行っている。研究の検討、整理にあたっては、教育臨床心理学研究室ゼミナール諸氏の、討論参加を含めて多大な協力を得ていることを付記して、感謝の意を表したい。

注

- 1) 佐藤直哉「母性という神話もたらしたもの」井上学（編）『心理学入門』（宝島社，1996），pp.51-53.
- 2) 大日向雅美『母性の研究』（川島書店，1988），p.83
- 3) 岸田秀『母親幻想』（新書館，1995），pp.43-44.
- 4) 柏木恵子『親の発達心理学』（岩波書店，1995），pp.49-55.
- 5) 牟田和恵「ジェンダーと家族」石川実（編）『現代家族の社会学』（有斐閣ブックス，1997），pp.39-54.
- 6) 小西規子・秦野悦子・毛塚恵美子・小泉左江子・高崎絹子「母親の育児意識に関する一考察」『日本教育心理学会第23回総会発表論文集』（1981），pp.302-303.
- 7) 柏木恵子，前掲書4），pp.180-181.
- 8) 牧野カツ子「乳幼児をもつ母親の生活と育児不安」『家庭教育研究所紀要』3（1982），pp.34-56.
- 9) 山田順子「人間関係論（その1）親子関係についてⅢ大学生の“親”としての自己の未来像に関する調査報告」『文教大学情報学部紀要』3（1982），pp.80-93.
- 10) 三尾多世「親志向意識の発達の要因に関する一考察」（信州大学卒業論文，1993），114 p.（未発表）
- 11) H. S. ハーロウ，浜田寿美訳『愛のなりたち』（ミネルヴァ書房，1978），pp.108-121
- 12) 花沢成一・松浦純「男女青年における対児感情と乳児接触経験との関係」『日本教育心理学会第28回総会発表論文集』（1986），pp.356-357.
- 13) 青木まり・松井豊「女子青年における女性性発達の様相（2）-乳幼児の表情の評定による母性準備性の検討-」『日本教育心理学会第29回総会発表論文集』（1987），pp.244-245.
- 14) 青木まり・松井豊「青年期後期における女性性の発達 -異性性と母性準備性の構造について-」『北海道大学紀要（第一部C）』39（1）（1988），pp.85-94.
- 15) J. ボウルビィ，二本武監訳『母と子のアタッチメント』（医歯薬出版株式会社，1993），p.170.
- 16) 柏木恵子，前掲書4），pp.172-175.
- 17) 山田順子，前掲論文9），pp.80-93.
- 18) 三尾多世，前掲論文10），114 p.
- 19) 山田順子，前掲論文9），pp.80-93.
- 20) 三尾多世，前掲論文10），114 p.
- 21) 佐藤みどり「青年女子における親志向意識尺度と母と娘の接触行動尺度の作成」（信州大学行動特殊実験論文，1997），76 p.（未発表）
- 22) 三尾多世，前掲論文10），114 p.
- 23) 岩溪恵子「父娘間の情緒的結びつき」『追手門学院大学心理学論集』1（1993），pp.11-18.
- 24) 佐藤みどり，前掲論文21），76 p.
- 25) 山田順子，前掲論文9），pp.80-93.
- 26) 久世妙子・芳賀亜希子・吉見昌弘・加藤珠子「母性意識形成に関する研究-青年から母親になる過程における変化-」『愛知教育大学研究報告』41（1992），pp.151-162.
- 27) 山田順子，前掲論文9），pp.80-93.
- 28) 三尾多世，前掲論文10），114 p.
- 29) 佐藤みどり「青年女子の親志向意識を規定する親との交流様態」（信州大学卒業論文，1998），91 p.（未発表）